

方針 4 「うたごえ新聞創刊50周年」を内外にアピールする1年として、歌の広がりやうたごえ新聞につなぎ、豊かな「うたごえ発ジャーナル」を確立する。

## [ うたごえ新聞、季刊『日本のうたごえ』 ]

うたごえ新聞05年は、「憲法が生きる21世紀 被爆・戦後60年 いのち輝く2005年」を基調に編集。4月に創刊50周年、11月に創刊2000号を迎え、歴史を振り返り、新たな出発へのステップとした。

創刊50周年キャンペーンでは、音楽家、識者、文化団体からのメッセージで「民衆発音楽シーンを拓く」を特集。4月10日の「創刊50周年記念レセプション」は全国から154人の参加を得、東京で開催。記念トークには本紙連載執筆者、作曲家の池辺晋一郎氏とジャーナリスト伊藤千尋氏を迎え、「歌は訴え、新聞は“元気”をリード」「社会変革の裏に歌」など、うたごえ新聞の存在意義をあらためて伝える場となった。2000号は、本紙を応援する若いリーダーたちからの激励を得た。

年間を通して憲法をまもるうたごえアクションを紹介。また、改憲の本質に迫る識者からの提言や音楽創造へのアプローチとして、鳥越俊太郎、秋葉忠利、高遠奈穂子、松元ヒロ、斎藤貴男、岡田尚、山崎朋子、肥田舜太郎、松原徹、ジェームス・デプリースト氏らの紹介は、文化の発信者として、時代を見つめる目を示す材料を提供した。

被爆・戦後60年・ひろしま祭典企画に、「くまさんの まっとるけ～きんさいよ」をはじめ、ひろしま祭典運動を喚起し、被爆60年ヒロシマを学び直す連載を行った。新企画は懸案の批評活動を活発にするため、音楽評論家小村公次氏による「音楽時評 読み書き 語りあうために」を開始した。

通信・情報提供活動では長野、宮城などから新しい通信者が生まれ、うた新青年編集局が稼働し始めた。うたごえ新聞の中身を直接伝え、地方編集会議として位置づけている うた新フォーラム は50周年キャンペーンと合わせて6県で開催。開催地での送稿、読者増につながっており、全県開催を急ぐ必要がある。

季刊『日本のうたごえ』 は、理論学習にと位置づけ、05年度は被爆・戦後60年、憲法改悪の動きの中で、運動の進め方を示唆する講演や座談会を特集した。「被爆60年によせる文化・音楽 うたごえ運動への期待」（安斎育郎）、「憲法『改正』へのねらい」（姜尚中）他。また、浅井敬壹世界合唱シンポジウム京都実行委員長の登場、手引きとして活用できる「作詩の話」「作曲の話」の創作特集を組んだ。

3カ月発行のサイクルを生かした特集企画、運動内外の論文など、長期展望にたった編集企画が課題である。

方針 5 うたごえ出版物をより多くの人にひろめ、様々な出会い・ドラマ・感動の輪を広げる。

## [ 事業・出版普及活動 ]

現在事業部として出版物を普及している団体は約100団体、年間約850回の販売対

応にとりくんでいる。出版物の普及は歌って広げることと合わせて、うたごえ普及のもう一つの手段であり、また財政活動の点からも、加盟団体の事業部確立を重視していきたい。

「憲法・平和」のコンサート・うたう会など全国的に展開され、03年11月3日から始まった「憲法大好きコンサート」はきたがわてつさんの出演だけで178回、推定186000人に「憲法のうた」を届けた。憲法賛歌「わたしを褒めてください」（ジェームス三木詞）が急速に広がり、CD「TETSU」も好評である。

全国的には4つの歌集の普及をとりくんだ。春闘、メーデー、諸集会には「メーデー歌集」、憲法、平和のつどい、平和行進などには「憲法・平和歌集RIBBON」、ひろしま祭典とタイアップしたソング集「うたうたうた05」と1000人のヒューマンボイス成功への合唱曲集「アメイジング・グレイス」を、目的、用途別に普及した。「05メーデー歌集」は労働組合、実行委員会からの注文も少なからずあり、「歌う活用」を重視することで、前夜祭、メーデー歌覚える会、メーデー当日のうたごえ行動など一定改善され昨年を上回った。祭典関連の二つの歌集は練習会、うたう会で活用され、特に合唱曲集は3200冊普及で祭典成功の力になった。

音楽センター出版物では、保育、教育、手話などが主力になり講演会、カレッジなどに多数の参加がある。各地の運動と一体となったとりくみは今後に大きな可能性を持っている。

各合唱団、個人の自主出版も活発に行われ、これらの各出版紹介、交流も大切である。